HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 静狩金山:北海道産金史研究 |
| Author(s) | 浅田, 政広 |
| Citation | 經濟學研究, 37(1), 79-101 |
| Issue Date | 1987-06 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/31765 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 37(1)P79-101.pdf |




Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 37-1
北海道大学 1987. 6

# 静狩金山

## —— 北海道産金史研究* ——

浅田政広

### はじめに

静狩金山は国鉄室蘭本線静狩駅の北方約1㎞の所に位置し，交通の便が極めて良く，平坦な海岸段丘と海が前面に開けているという点で他の道内金山とは違って，著しく立地条件に恵まれていた。

本金山は明治中頃に発見され，大正5年頃から開発されていったが，その後川崎造船所，住友合資会社等の独占的鉱業資本の手を経ながら，戦前においては昭和18年の金鉱業整備まで操業を続けた。戦前の最も盛んな一時期においては，鴻之舞に次ぐ金山として豊富な鉱脈，産金量を誇っていたこともあった。戦後の2度の再開の中で少量の生産をみたこともあったが，昭和37年8月の閉山以来，現在に至っている。

大正9年から現在までの累年総産金量は約6,242kgであり，これは全国第19位，全道第4位を占めるものである[1]。また，戦前の総産金量は5,089kgであり，これは鴻之舞，手稲に次いで全道第3位（全国第9位）に位置づけられるものであった[2]。これらの数字は，静狩金山がわが国屈指の金山であったことを物語っている。

このように重要な金山であったにもかかわらず，他の金山同様，残された資料は極めて少なく，また研究に関しては地質鉱物学等の自然科学系統のものが存するのみである。したがって，本金山の研究にあたっては，多くの人々や機関から貴重な資料の提供を受けたり，聞き取り調査等に多大の協力を得ている。静狩金山興業株式会社（代表取締役専務，蓑田登美雄氏），金子喜代之輔氏（明治40年生，静狩在住），栗原春松氏（大正9年生，静狩在住），本間スマ（明治32年生，静狩在住），本間トシエ氏（昭和2年生，静狩在住），加藤至昭氏（大正15年生，長万部町在住），平野勇氏（昭和4年生，長万部町在住），国分よね氏（明治34年生，静狩在住），孔山吉童氏（大正7年生，名古屋市在住），佐藤光顕氏（大正6年生，釧路市在住），長万部町役場（総務企画課），札幌通産局（鉱山部測図課，出願課），北海道地下資源調査所（図書室），北海道開拓殉難者調査委員会，日本近代文学館等の皆様方，各機関である。ここに明記し，厚く感謝の意を表します。

### I 静狩金山と初期の開発

#### 1. 発見

* 本稿は「鴻之舞金山」（旭川大学『地域研究所年報』第4号，「千歳金山」（同，第5号），「手稲鉱山」（同，第6号），「珊瑠金山」（『旭川大学紀要』第21号），「徳星金山」（北海道大学『経済学研究』第36巻第4号）に続くものである。

1）大正9年から昭和25年までは，北海道鉱業会『北海道鉱山累年生産実績』昭和41年版による。昭和36年，37年は，藤原哲夫・松井公平「静狩鉱山の金銀鉱床」『北海道地下資源調査資料』第86号記載の数字から36年を2,100t/年，7.5g/t，37年を7月まで1,575t，5.75g/t として算出し，8月50t，7g/t 分を加算して導いた。なお，全国順位は随伴鉱山をも含む。

2）地質調査所『日本鉱産誌』1955年，第13表「金銀鉱山別産額表（1925—1945）」より。

静狩金山は明治の中頃，磯野金作によって発見されたと言われている。

『北海道の産物』によれば，磯野金作は山口県出身の人で当時小樽に住み，鮪大謀網を経営していた漁業家であったが，鉱山にも興味を持ち，明治23年8，9月頃，噴火湾沿岸茅部，山越，虻田の各郡に有する漁場巡視の途次，当金山を発見した。そこで，試掘権を得るため当地の有志に諮ったが信ずる所とならず，再び同25年，同業の高岡文三郎とともに当地を訪れ有望な鉱石を発見，再び有志を募ったが，この時も誰も耳を貸す者はなかったのである。この時，磯野はすでに73才であり，その後，漸く明治33，4年頃，某氏とともに試掘権を得たが，結局は高令のため，起業に至らなかったという[3]。

これでみると，静狩金山はすでに明治20年代に発見されていたと考えられる。しかし，その発見年について実は定かではない。『北海道鉱山累年生産実績』記載の明治4年というのは措くとしても，『長万部町史』では明治39年，「静狩金山の金銀鉱床」では明治42年となっている。また，『北海道鉱業誌』大正13年版によれば，「今ヨリ十六年前小樽ノ磯野金作氏当地ニ金鉱ノ存在ヲ唱ヘ」とあるから，明治41年の発見ということになる[4]。

このように文献によってそれぞれ発見年が異なり，試掘権登録等の依拠すべき第一次資料も存在しない以上，その確定は不可能である。

磯野等が得たこの鉱区は，その後わずかに硅石山として稼行されたことはあったが，金山としては探鉱もされず，暫時放置されたようである[5]。そのうち，この鉱区の試掘権はおそらく自然消滅したものと思われる[6]。

その後，大正5年になってあらためて試掘出願がなされている。出願人は木山與一であった。木山は石川県能登（鹿島郡）の人で，大正5年7，8月，寿都町の中田米蔵，辻原某とともに来馬川を遡り，探鉱に着手，翌6年2月17日，試掘権が認可され，5月から本格的に採鉱開始した[7]。さらに，大正7年11月21日には試掘権からの転願の結果，第30号として採掘権が登録されている[8]。

このようにして，初めて金山としての基礎が築かれていったので，資料によっては大正5年を発見年，木山與一を発見者とするものもある[9]。

大正5年の試掘権出願時の様子は，今堀喜三郎によれば，次のようであった。

「其頃石川県の人で内地及び朝鮮の金鉱で成功したと伝えられる木山与一氏が鴻之舞の噂を耳にするや，逸早く部下を引連れて来道し，先ず水野氏の鉱区を買山目的で入山調査中，同坑の隣りに聳える山の頂上を通る道路が新設されて其路面に石英の露頭が出た噂を

3）主として札幌鉄道局『北海道の産物』昭和3年，93頁による。なお，静狩青年団『郷土誌』昭和22年によれば，磯野金作は明治25年から足掛3年に渡って踏査，探鉱をしたが，出資者である小樽の木材商が日清戦争で所有船を喪失したため運転資金に窮し，一時探鉱を中止。しかし，明治37年頃より再び探鉱を開始し，案内人和島藤太郎とともに100万坪の試掘出願をしたとある（同書56頁）。したがって，共同出願をした相手は和島藤太郎と思われるが，その年代については不明である。しかし，残された資料の中では『北海道の産物』が一番詳しいと思われたので，ここではそれに依拠している。

4）それぞれ，前掲，『北海道鉱山累年生産実績』5頁，『長万部町史』昭和52年，176頁，藤原・松井，前掲論文，2頁，北海道石炭鉱業会『北海道鉱業誌』大正13年版，345頁。なお，42年説は上述のほかに「同和鉱業資料」（昭和42年12月），地質調査所『北海道金属非金属鉱床総覧』（1967年）があるが，これはおそらく藤原他，前掲論文によるものと思われる。

5）前掲，『北海道鉱業誌』345頁。

6）試掘権は2年間有効で更新は1回（石油のみ2回）可能である。その後，採掘権に変更しない限り継続できない。したがって，更新すれば4年間は試掘できるが，その後は消滅してしまうのである。緒方乙丸他『日本の鉱山』内田老鶴圃新社，昭和43年，355頁による。

7）主として前掲，『北海道の産物』による。なお，『旭川新聞』昭和11年12月9日号は木山を佐渡の産としている。

8）札幌通産局鉱山部資料。

9）発見年を大正5年としているのは『北海道鉱山学会誌』第1巻第7号，昭和17年7月，355頁であり，木山を発見者としているのは前掲『旭川新聞』である。

聞込み，密かに現地を実査した木山氏は口実をもうけて退山，直ちに出札して出願手続を行った　之が静狩金山であった」[10]

この通りだとすれば，木山興一というのは相当の鉱山師だったようで，鴻之舞の噂に逸早く反応し，部下さえも引連れて来道，静狩ではぬかりなく出願手続きを済ませている[11]。

しかし，当時の静狩一帯は鴻之舞以来の金鉱熱が集中し，「白い石を見れば猫も杓子も競うて出願し，噴火湾沿岸長万部から豊浦迄の間，寸尺の空地もない程出願輻輳の盛況を呈した」[12]という状況であり，木山の素早い反応も，このような一刻を争う争奪戦の勝利の一齣であったにすぎない。

なお，ここにいう「水野氏の鉱区」とは水野伊三郎所有の来馬鉱山である。水野は小鉾岸鉱山の鉱業権者ともなり，この両鉱山は後に住友合資に買収され，その後，静狩金山と合併することになる。

木山は一方で探鉱を進めながら，他方で一部良鉱は定山渓常陸鉱山（久原鉱業）へ，後，大正9年からは小坂鉱山に売鉱した。そのルートは「現川上商店裏へ桟橋を架け，噴火湾汽船の船を以て青森へ送り，陸路秋田小坂鉱山迄輸送」[13]というものであった。

## 2.　初期の開発と川崎造船所による買収

前述したように，大正6年に試掘権が認可され，次いで翌7年11月に採掘権への転願が認められると，いよいよ採掘は本格的なものとなり始め，探鉱の傍ら，良質（高品位）の鉱石は小坂鉱山等へと販売した。しかし，他方で売鉱に適さない比較的低品位の鉱石が累積し，この貧鉱処理のため，大正9年8月，小型の青化製錬所が建設された。その鉱石処理能力は月300トトン（1日10トン）であった[14]。

大正12年12月，株式会社川崎造船所が90万円で静狩金山を買収した[15]。この90万円というのは，6年前の住友による鴻之舞買収価格と同一である。あるいは鴻之舞に匹敵するものを，川崎造船所は静狩に認め，かつ期待していたことの証左とも思われる。

昭和4年8月から金鉱の浮游選鉱の研究が始まり，同5年11月からは1日40トン処理の試験操業が開始された。しかし，工場設備の各部に不備多く，故障相継ぎ，その改造補足に約1年を費すという状況であった。結局，「金鉱の浮選及び浮選精鉱の青化処理は決して不可能に非ざるものなること」[16]という結論を得て，浮游選鉱は中止された。

昭和7年12月から1日50トンの処理能力をもつ全泥式青化製錬所が操業を開始した。

川崎造船に買収されたころの従業員数は35名（男32名，女3名）であったが，買収後の昭和2年頃は84名に増加している[17]。

10) 今堀喜三郎「焼けを探ねて五十年〔四〕」北海道鉱業振興協会『地下資源』第4号，1959年3月，24頁。

11) しかし，前掲『旭川新聞』によると，木山は流れ流れて北海道へ渡り，有金も使い果し，ほとんどルンペン同然となって静狩にたどり着いた。そこで露頭を発見したときは明日の米さえも心配するほどだったから，狂喜して躍り上ったのも無理はないとある。今堀の記述とは随分の相違であるが，これは「儲けた話・損した話，師走のサイレン」というシリーズ物の記事であり，話を読者向けに脚色している節もあり，にわかには信じ難い。

12) 今堀，前掲書，24頁。

13) 前掲『郷土誌』57頁。

14) 『北海道鉱業誌』昭和9年版および土屋裕「静狩鉱山の現況に就いて」『日本鉱業会誌』第615号，昭和11年7月による。この最初の製錬所の処理能力について誤植の目立つ資料が多い。たとえば，北海道鉱業会『北海道の金属鉱業』1952年，前掲「同和鉱業資料」，前掲『北海道金属非金属鉱床総覧』は300 t/日，『北海道鉱業誌』昭和3年版は10t/月となっている。なお，前掲『北海道鉱業誌』大正13年版では10万貫/月とある。また，前掲『北海道鉱山学会誌』は製錬所の設置を大正8年としている。

15) 日付については12日（『北海道の産物』）とするのと，10日（『北海道鉱業誌』昭和9年版）とするのがある。

16) 田島六郎「静狩鉱山の金鉱浮游選鉱に就いて」『日本鉱業誌』第578号，昭和8年6月，452-3頁。

17) 前掲『北海道鉱業誌』大正13年版および昭和3年版より。

この間，すなわち木山経営時代（大正9～12年）と川崎造船経営時代(大正12年～昭和7年)の静狩における産金量は次表の通りであった。

**表1**　静狩金山における産金量(大正9年～昭和7年)

(単位：g)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 大正9年 | 4,665 | 昭和1年 | 48,431 |
| 10 | 18,458 | 2 | 44,003 |
| 11 | 26,344 | 3 | 43,691 |
| 12 | 45,338 | 4 | 43,017 |
| 13 | 25,261 | 5 | 25,247 |
| 14 | 39,109 | 6 | 67,598 |
| | | 7 | 65,172 |

（備考）　産金量は精鉱含有量。北海道鉱業会『北海道鉱山累年生産実績』昭和41年度，30-1頁より。

## II　戦前の静狩金山

### 1.　住友合資会社との合併

昭和8年8月，川崎造船所経営下の静狩金山は隣接鉱区である来馬，小鉾岸鉱山を所有していた住友合資会社と合併した。来馬は大正6年8月に，小鉾岸は同11年10月にすでに住友が水野伊三郎より買収していた金山であった[18]。

合併に至る事情を，合併後の静狩鉱業所初代所長土屋裕は次のように述べている。

「以上2鉱区の関係を見るに，互に相隣接せる上静狩鉱区は其面積60万余坪に過ぎず，鉱区稍々狭隘の感無きにあらず，他方来馬鉱区は面積200万坪に近き広さを有するも，其地形上徹底せる探鉱の遂行には静狩方面より開坑する方有利なるのみならず，交通運搬にも便利勘なからず，依りて之等鉱区を合し以て大方針の下に操業する方有利なりとの意見起り，数次に亘る川崎，住友の折衝の結果遂に交渉調ひ，昭和8年8月之等鉱区を合し新に静狩金山株式会社の創立を見るに到れり」[19]と。

すなわち，合併への誘因は第一に探鉱，採鉱の便，第二に交通運搬の便であったとみてよいであろう[20]。また，土屋は触れていないが，満州事変，上海事変と大陸での戦火拡大にともなって急激に増加してきた戦費調達のための産金奨励という国策に沿った点もあったと思われる。『郷土誌』がこの合併について「国家利益を主眼点とした企業合同の…（中略，引用者）…魁」[21]と述べているのは，まさにそのことを指したものであろう。

この合併にともない，新会社静狩金山株式会社（常務取締役　小池寶三郎，鉱業代理人　土屋裕）が発足した。資本金は，それぞれ川崎造船所が100万円，住友合資が110万円を分担し，計210万円であり，現物出資という形態をとった[22]。

当金山の本格的発展はこれ以降のことに属するが，それについては節を改めて見ることにしよう。

なお，大正7年11月21日付で木山與一が獲得した鉱業権，いわゆる「採登第30号」は，この企業合同からさらに2年後の昭和10年11月19日に後志第56号，第57号との合併のため抹消され，新しく「採登第59号」として登録されることになった[23]。

### 2.　静狩金山の発展と産金量

昭和8年8月の静狩金山株式会社の発足後，事業は急激に，かつ本格的に発展してゆく。こ

18) 合併の日付について，前掲藤原・松井論文は15日，『郷土誌』は16日としている。なお，来馬については前掲土屋論文，小鉾岸については『北海道鉱業誌』大正13年版より。

19) 前掲，土屋論文，547頁。

20) この点に関して，前掲藤原・松井論文は「アメリカにおける金価引上」としているが，これは疑問である。日本では金再禁後，昭和7年3月から次第に金の買上価格が引上げられていったが，これはアメリカにおける金価格引上げとは無縁である。アメリカで金1オンスが35ドルに引上げられたのは1934（昭和9）年1月のことである。

21) 前掲『郷土誌』57頁。

22) 同上。

23) 札幌通産局鉱山部資料。

れ以降の約10年間がいわば静狩金山の黄金時代であった。

昭和9年7月には自山製錬の目的をもって月1万トン（1日350トン）処理能力の全泥湿式青化製錬所が竣工し，大規模な青化製錬が開始された。これは従来のものの7倍の能力を有するものであった。

同年9月，近接の礼文鉱山を買収した[24]。同鉱山の鉱脈平均品位は 8～10 g/t であり，大正14年10月，可西吉次郎が試掘権を得た後，転々として昭和6年以降，豊田義明の所有に帰していたものであった[25]。

このような大規模製錬に入った結果，産金量は60kg台から500kg台へと飛躍的に増大し，鉱山は活況を呈した。当時の新聞は，「金湧く静狩」とまで形容し，「物凄い黄金景気」に沸く鉱山の様子を伝えている。それによると，山の中腹にはこの漁村に似つかわしくない近代的な製錬所，事務所，住宅等が立ち並び，千人近い人口をもつ一大鉱山街を現出しているという。また，小学校へは5教室を寄付し，先生3名分の俸給を毎年村に寄付し，最近は貧しい小漁師30余名に漁業組合を組織させ，漁具代として1万5千円を提供したという話題などを載せている[26]。

他方で，昭和12年7月7日の支那事変勃発後，金の政府集中を一層はかるため，国家的金政策はますます強圧的色彩を濃厚にしつつあり，種々の産金奨励策に加えて昭和13年度からは産金5ヶ年計画が実施に移されていった。この計画は，内地について昭和12年度実績の2.4倍に相当する56トンを，外地（台湾，朝鮮）については3.1倍の75トンを産出するというものであった。「東洋のトランスバール」とまで呼ばれた北海道に対しては，札幌鉱山監督局の下に大増産計画が樹立された。それによると，昭和13年度から17年度までの5年間に3.8トン（1,300万円）から20トン（7,540万円）へ，実に全国平均をはるかに上回る5.3倍（価額では5.8倍）までも増産するというものであった[27]。

昭和12年7月16日には札幌鉱山監督局会議室で道内の主だった金山を集め，増産のための協議会が開催されている。そこでの協議事項は，

一．金増産の方策に関する件

選鉱，製錬成績の向上，事業機械化の普及，探鉱の促進，貧鉱処理の促進，技術員の養成

二．鉱滓処理に関する件

鉱滓堰堤の築造，将来の鉱滓処理方針

というものであったが，会議の最後の場面で鉱業課長が「各金山に於ける今後の増産見込に関して出席者一同の意見を聴取」したということからも明白なように，この会議の目的は金の増産という国家の大号令の下に各金山に対して発破をかけることにあった。

この会議には静狩から土屋所長が参加したほか，鴻之舞，国富，珊瑠，千歳，天龍，北海道，北ノ王，轟，手稲，大金，大盛，徳星，北隆等の各金山，製錬所から所長または技術管理人が動員された[28]。

こうして昭和13年に入ると，「本道の資源開発　刻下の国家的要求　金山も総登場」あるいは「戦時国策線に平行　産金界も一路驀進」さらに，「本道各地に製錬所　拡張また新設」という見出しで大々的に新聞報道されるほど[29]，産金界は国策を強力な背景にして活況に沸いたのである。

静狩金山もまた，その例外ではありえなかった。すでに昭和12年1月に製錬所拡張計画が新聞に公表されている。それによれば，1日の処理鉱量は350トンから1,000トンへ，さらに100万分の5から3.5への低品位鉱の処理をおこない，1ヶ月に95kgの金を得ようというものであっ

24) 静狩金山株式会社『閉山記念』（アルバム）昭和18年4月1日，より。
25) 前掲『北海道鉱業誌』昭和9年版，484-5頁。
26) 『北海タイムス』昭和11年1月14日付。ただし，漁業組合の組織化の意味については本稿，鉱害の項参照。
27) 同，昭和12年11月7日付。
28) 同，昭和12年7月17日付。
29) 同，昭和13年1月6日付，同年5月4日付，同年6月19日付。

た[30]。

計画は実行に移され，1日1,000トン（月3万トン）処理体制へ拡張になった製錬所は，昭和13年8月1日からその操業を開始することになった[31]。ちなみに，月3万トン処理というのはこの段階では鴻之舞の3万6,000トンに次ぐ操業規模であった。

こうして低品位鉱の大量処理による増産が可能となったのであるが，その間の事情を当時の新聞は，「競争なら量で来い」という見出しで次のように伝えている。

「昨年八月産金増産五ヶ年計画を実施するや巨費を投じて緊急設備を三倍大に拡張し増産の一歩へ力強く踏みだした大体この鉱山は金品位世界中でも一番低く僅か百万分の三.三であるが廃鉱の運命から産金日本一に再生させた鴻之舞鉱山の偉物土谷裕氏が操業と共に所長になって量的産金を計画し直ちに五ヶ年増産計画を樹て近代機械化能力の技術的採鉱によって開拓の火蓋を切った」[32]と。

静狩金山の粗鉱の平均品位は10g/tであり，他と比較して遜色はないが[33]，鉱区が広大でしかも鉱脈巾が膨大なため，大量に低品位鉱が存在し，金増産の至上命令の下，製錬技術の向上とともにこれらの3.3g/tという貧鉱でさえも製錬処理されたのである。

この頃，すでに吸収合併していた小鉾岸鉱区は隣接の豊浦鉱山一鉱区とともに日本産金振興株式会社と静狩金山株式会社との共同同額出資で小鉾岸鉱山株式会社として新しい出発をみることになった。資本金は150万円，社長には日本産金振興の松本鉱業部長，常務取締役には静狩金山の土屋所長と小池北日本鉱業所長がそれぞれ就任し[34]，1日200トン処理の豊浦青化製錬所が昭和16年6月からその操業を開始した[35]。

これに先立って，日本産金振興に対する政府命令によって低品位，貧鉱処理のための製錬所建設の候補地探しがおこなわれていた。昭和14年6月初めには留辺蘂，天龍，静狩の三ヶ所が候補地としてあげられて調査考究中であり，同時に中学卒業生5名が実地訓練のため静狩金山に送り込まれていた。そして，結局，製錬所設置は「交通その他の関係から」静狩に隣接している大岸すなわち小鉾岸地区に内定していたのである[36]。

こうして大拡張の波に乗って躍進を遂げた静狩金山の産金量はどうだったのであろうか。その推移をみれば，次表の通りである。

**表2**　静狩金山における産金量（昭和8～19年）

（単位は$g$）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 昭和8 | 72,185 | 昭和14 | 716,243 (9.4) |
| 9 | 370,753 | 15 | 694,630 (−3) |
| 10 | 514,170 | 16 | 728,403 (4.9) |
| 11 | 565,623 | 17 | 792,028 (8.7) |
| 12 | 529,000 | 18 | 153,791 |
| 13 | 654,404 (23.7) | 19 | 94,000 |

（備考）1. 産金量は精鉱中含有量，（ ）は産金5ヶ年計画中の対前年増加率（%）。
2. 昭和8年は北海道石炭鉱業会『北海道鉱業誌』昭和9年7月，446頁より。
3. 昭和9～18年は北海道鉱業会『北海道鉱山累年生産実績』昭和41年版，32-3頁より。
4. 昭和19年は地質調査所『日本鉱産誌』93頁より。ただし，同書によると昭和16年から激減して，同16，17，18年がそれぞれ56kg，66kg，85kgとなっており，昭和19年のこの数字も疑わしい。

30) 同，昭和12年1月23日付。
31) 『帝国鉱業開発株式会社史』昭和45年，411頁には製錬能力が1日1,200トンとある。しかし，他の資料，実際の採掘粗鉱量からみて，やはり1,000トンの誤りではないかと思われる。
32) 『北海タイムス』昭和14年6月16日付。
33) 前掲『北海道金属非金属鉱床総覧』325頁。ただし，閉山間際の調査ではかなりの低品位であった。本稿，閉山の項および表3参照。
34) 『北海タイムス』昭和15年2月21日付。
35) 『帝国鉱業開発株式会社史』413頁。しかし，操業開始月が6月だったか否かは実は定かでない。『長万部町史』（436頁）には8月とあり，『北海タイムス』昭和15年2月21日付には9月竣工予定とある。
36) 『北海タイムス』昭和14年6月4日付および『旭川新聞』昭和14年6月14日付より。

すなわち，住友との合併後，数10kg台だった産金量は昭和9年の製錬所設置後一挙に500kg台へと増加し，同13年の製錬所増設後はさらに増えて700kg台で推移し，同17年の792kgをピークに翌18年の金政策の転換をむかえている。

静狩は昭和15年に手稲鉱山に追い抜かれるまで鴻之舞に次ぐ産金量を誇っていた。

また，『郷土誌』によれば，昭和9年から13年までの5年間の産金銀総額は1,000万円に達し，これは噴火湾一帯の漁獲高を遥かに凌ぐものであったという[37]。

昭和13年以降の大巾な増産は低品位鉱の大量処理によって可能となったもので，それは表3に明らかである。

**表3**　静狩金山の粗鉱量と品位（昭和14～18年）

| | 粗鉱量（t） | 品位（g/t） |
|---|---|---|
| 昭和14 | 240,350 | 2.98 |
| 15 | 301,094 | 2.30 |
| 16 | 314,273 | 2.20 |
| 17 | 294,330 | 2.60 |
| 18 | 59,410 | 2.57 |

（出典）北海道鉱業会『北海道の金属鉱業』昭和27年6月，81頁より。

昭和14年以降，およそ30万トンの粗鉱を採掘し続け，それが製錬原鉱となっていたが，その品位はトン当り2g台という驚くべき低位さであった。このような乱掘とも言うべき事態は手稲鉱山や徳星金山等他の金山においても見られたが，これは国家の緊迫した強力な金政策を梃子としてはじめて実行可能となったものである。

しかし，たしかに一定の増産を維持したとはいえ，国家目標の産金計画には遠く及ばなかったようである。国内全体で昭和12年度実績の2.4倍，道内では5.3倍を17年度に達成するという計画は，各金山に年率何10%か増の強制割当をせざるを得なかったが[38]，静狩金山の場合，対前年増加率はマイナスさえも含みながら，昭和13年から17年までほぼ700kg台で推移しており，計画達成率は相当低かったものと思われる。昭和17年の対12年度比は5.3倍はおろか，わずかに59.7%増でしかなかったのである。

しかも同時に，この間の生産は世界貨幣・金を得んがための「採算を度外視した強行対策」[39]であって，支出増大一方の経営は次第に悪化の道をたどり，太平洋戦争への突入という事情も加わって，ついに昭和17年11月21日，日本産金振興株式会社に全株式を移譲してその経営下に入り，翌年の閉山を迎えることになったのである[40]。

### 3.　鉱山街の形成と戦時金属増産運動

前節でみたような増産を支えるため，労働力需要は次第に増大し，従業員の着実な増加とともに，そこには鉱山街の形成がみられるようになる。また，金山の最盛期は戦時下の金属増産運動とも重なってくる。

まず，従業員数の推移についてみれば，大正12年の川崎造船所による買収の頃，35名（内，婦人3名）であった従業員は昭和2年頃には96名（内，「鉱夫」84名，その内13名が婦人）へと増加していたが，昭和8年の住友との合併後，急激に増えて，同9年6月末現在で土屋裕所長以下425人（内，「鉱夫」390人，その内17名が婦人）となっている。その中でいわゆる「鉱夫」390人の内訳は次表の通りであるが，採鉱夫が124名で最も多く，次いで運搬夫が98名でそれに続いている。また，選鉱作業は全て婦人労働者に委ねられていた点も注目される。

昭和9年7月の製錬所設置後はさらに増加して，同11年頃には850人余（内，「鉱夫」600人），14年の製錬所拡張後の14年6月頃には1,370人

37）前掲『郷土誌』57頁。

38）他の金山への割当額は不明であるが，鴻之舞に対しては年率19.4%の増産が強制された。拙稿「鴻之舞金山」参照。

39）前掲『郷土誌』58頁。

40）前掲『閉山記念』。なお，『郷土誌』は日本産金振興株式会社への株式譲渡の日付を11月27日としている。

表4　静狩金山の「鉱夫」内訳（昭和9年6月末現在）

| | 採鉱夫 | 支柱夫 | 運搬夫 | 機械夫 | 製錬夫 | 工作夫 | 選鉱夫 | 雑　夫 | 助　手 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 坑内（男） | 124 | 31 | 93 | 8 | − | − | − | 43 | 5 | 304 |
| 坑外（男） | − | − | 5 | 7 | 25 | 21 | − | 6 | 5 | 69 |
| （女） | − | − | − | − | − | − | 14 | 3 | − | 17 |
| 計 | 124 | 31 | 98 | 15 | 25 | 21 | 14 | 52 | 10 | 390 |

（出典）　北海道石炭鉱業会『北海道鉱業誌』昭和9年7月，456頁および「北海道工業試験場時報」第4年第5号，昭和11年5月，第6表より。

（内，約70名が婦人），15，16年頃には1,600人へと膨張し，昭和18年の閉山時には約2,000人にものぼる従業員数であった[41]。

その結果，大正末から昭和初期にかけて，わずか100戸足らずの寒村であった静狩は長輪線（室蘭線）の全面開通（昭和3年）ともあいまって，昭和15年には1,400戸，人口7,000人にまで成長し，これは長万部全村の半分を占めるものであった[42]。そして，言うまでもなく，静狩の戸数，人口の圧倒的部分が金山側に負うものであった。

昭和14年現在で労務員住宅154棟882戸，職員住宅34棟61戸，計188棟943戸のほか，職員合宿（誠貫寮），労務員合宿（静和寮），病院，体育館，物資配給所，社員倶楽部（会館），接待館等の建物が小高い所にある製錬所や鉱山事務所の下に展開していた[43]。それらは静狩旧市街をはるかに凌ぐ広さで整然と立ち並び，一大鉱山街を形成していたのである。

昭和17年には愛媛県大山祇神社より分霊した金山神社が創建されている。

『長万部町史』はその頃の静狩について，

「当時，夜行列車に乗ってトンネルの闇をぬけると，急に静狩金山の夜景がひろがった。それを川端康成の『雪国』の有名な書きだしのような情趣をもって述べることはできないが，突然目の前にひらける街あかりは，一瞬，夜の都会の現出を思わせるものがあった」

と述べて，さらに「静狩の市街には長万部におとらない数の飲食店があって活気を呈していた」と記している[44]。盛んな頃の情景が彷彿として眼前に浮かぶようである。

小学児童数の推移からもその頃の様子をうかがうことができる。すなわち，昭和8年に5学級5教員，児童数241名だったものが，同15年にはそれぞれ21学級22教員，児童数1,445名へと急増している。閉山後の児童数が400数十名であるところから推量すれば，最盛期約1,000名が金山関係者の子弟だったとみてよいであろう[45]。

増産が強制された頃，出勤する従業員を激励するため，これらの小学児童達が動員され，毎早朝鉱山に向かう沿道にズラリと勢揃いしたこともあった。また，その際には大きなスピーカー（放送塔）から行進曲風の音楽が流されたという[46]。『閉山記念』（アルバム）によると，この放送塔は「朝夕ノ激励，慰安ノ音楽ヤ増産ノ決意ヲ表明スル講演或ハ非常伝達等」に利用さ

41）以上の数字は，それぞれ『北海道鉱業誌』大正12年版，昭和3年版，同9年版，『北海タイムス』昭和11年1月14日付，同，昭和14年6月16日付，『郷土誌』，『長万部町史』による。

42）静狩小学校開校八十周年記念協賛会記念誌部会『静狩校』昭和57年9月，18頁。

43）『長万部町史』436頁。なお，（　）は筆者による付加である。社員倶楽部（会館）は，昭和9年頃は鉱夫集会場と呼ばれ，月1回以上，講演や映画会が催されていた（『北海道鉱業誌』昭和9年版，457頁）。最盛期には毎日のように映画がかかっていた。

44）『長万部町史』436頁。

45）前掲『静狩校』31頁。

46）加藤至昭氏による。氏は昭和16年に高等科を卒業して静狩金山に入社し，庶務課で勤務した。

れたものであった[47]。

増産が特に2回に亘って強制された期間があった。第1回目は昭和16年5月から7月までの「全国金属増産強調期間」であり，第2回目は昭和17年7月および8月の「戦時金属非常増産強調期間」である。

これらの「増産強調期間」を通じて増産の実を挙げた鉱山の中からその多寡に応じて商工大臣賞（対鉱山）や厚生大臣賞（対従業員）が与えられた。前「期間」の結果として，道内では手稲鉱山が商工大臣賞を授与され，静狩金山は手稲，鴻之舞，珊瑠等8つの金山とともに道内優良鉱山の1つに選ばれている。また，後「期間」の結果として，静狩金山は道内12（内，金山は3）の優良鉱山の1つに選出され，優良現場職員（道内で21名）として海藤啓一が，優良労務者（同，48名）として伊勢松太郎，伊藤重三，成田父母衛の3名が，優良主婦（同，25名）として海藤アキがそれぞれ選出され，9月30日に札幌鉱山監督局で表彰式が挙行されている[48]。

このうち，海藤啓一は厚生大臣賞を受賞し，同年11月5日，雑誌社（『日の出』）によって全国鉱山従業員20名とともに東京茗渓会館に招待され，表彰式に参列したあと，同誌主催の座談会に出席している。そこで海藤は，愛児の死をかくしてまでも働いていた男（木村某）や皮膚が侵されるのも厭わず製錬場で石灰の投げ入れ作業をしている松田佐吉の話などを増産への意気込みの例として紹介している[49]。

しかし，翻って顧みれば，当時の状況がいかに活気に満ちて見えようとも，逆にそれは増産の大義名分の陰でまさしく人間破壊的事態が進行していたということの有力な証拠ともなっているのである。

これら両「期間」の間の昭和17年5月1日から2日間に亘って，産報札幌地方鉱山部会主催の第1回全道採鉱技能競練大会が手稲鉱山で開催され，静狩金山チーム（松本政市，岡清，藤村喜三郎，中島七太郎）は手稲鉱山に次いで第2位に入賞し，全国大会への出場権も得ている。この大会は，各鉱山の採鉱技能を競わせる

47) この時，流されたであろう行進曲風の「静狩鉱山歌」（加勢清志作詞，飯田信夫作曲）は次のようなものであった。

一　小暗き暁のサイレンに　キリ〳〵としたく妻も子も
　拝む護りの神かけて　産業報国わがつとめ
　つとめに咲かす静狩の　花よ黄金よ我等が職場

二　光流れる坑内の　闇に輝く珠の鉱石
　掘って砕くも鉄の腕　滅私奉公わが誇り
　ほこりに咲かす静狩の　花よ黄金よ我等が職場

三　力の響ゆるみなき　機械の蔭に一条の
　意気相許す眸は　協力一致わが誓
　ちかひに咲かす静狩の　花よ黄金よ我等が職場

四　汗を拭って御苦労様　明日も行かうぞ頑張って
　夕日に映える駒ケ岳　産業戦士わが誉
　ほまれに咲かせ静狩の　花よ黄金よ我等が職場　（前掲『閉山記念』より）

48) 『北海タイムス』昭和16年10月24日付および同，昭和17年9月24日付。

49) 『日の出』昭和18年1月号，112～121頁。また，同誌，昭和18年7月号には「闘ふ鉱山を訪ねた報道班員の座談会」という記事があり，その中で津田秀栄鉱山統制会理事長は次のように当時の模範的な鉱山として静狩を紹介している。「事実こゝ数年，殊に大東亜戦争勃発後に於ける鉱山の国家意識は全く素晴しいものです。昨年の金属増産期間中にあったことですが，北海道の某鉱山では全体の出勤率九十八パーセント，これは未だ世界にない優良な成績です。これの出来たのは，一に労務者の時局認識によるが，こゝの土屋鉱山長の熱意にあったことも確です。土屋さんは皆にいった。自分は敵米英のどの鉱山長にも負けない鉱山長になる，鉱夫諸君もどうか米英のどの鉱夫にも負けぬつもりで頑張って下さい。又地元の人は地元の人で，米英のどの地元の人々にも負けぬやう協力して下さい，といふことで自ら陣頭に鶴嘴を振ったのです。一方，家庭の主婦たちは，それぞれ夫に心配かけるなと極く細い所まで気を遣ひ，朝夕の出坑入坑には坑口まで出かけて，『元気にやって下さい，どうも御苦労様です』と挨拶をする。又夫の働いている留守中，たゞだまって家にゐるのは勿体ないといふので，空地を開墾して野菜をつくったが，その収穫は大根が七，八万本，馬鈴薯が一万五，六千貫あったといふのです。これが今日の鉱山の姿です」（56頁）。

中で「国家意識」を高め，戦意高揚を図ると同時に，増産目標の達成を狙うという意図をもったものであった[50]。

「戦時金属非常増産強調期間」の後には，勤続年数の長い労働者に対して勤労章が設けられ，静狩金山からは桜井勝助（採鉱係職員49才，勤続24年），谷口六郎（坑内工作夫51才，勤続25年）の両名が受賞し，昭和18年1月13日札幌鉱山監督局によって決定発表され，表彰式は同月19日厚生商工両大臣代理，北部軍司令官，北海道石炭鉱山両統制会支部長等臨席の下，札幌グランドホテルでおこなわれた模様である[51]。

しかし，閉山が既定方針となっていた段階での表彰であってみれば，それはいささか空しいものであったに相違ない。

増産を鼓舞するため，この両「期間」中に慰問隊が組織されている。

大日本産業報国会では「全国金属増産強調期間」中の昭和16年6月5日から27日まで23日間，全国主要鉱山65ヶ所に鉱山従業員慰問隊を派遣した。浪曲，漫才，歌謡曲各2名の構成で，北海道には6月6日から22日まで14ヶ所を巡るものであった。静狩金山には2日目の6月7日に訪れて慰問する日程であった[52]。

次いで，「戦時金属非常増産強調期間」中の昭和17年8月には移動演劇班，映画班が派遣されている。北海道の主要鉱山には演劇班が3日から11日まで，映画班は同じく3日から26日までの日程で巡るというものであった。静狩金山には8月11日，演劇班が訪れた模様である[53]。

しかし，このような鳴り物入りの金属増産運動ではあったが，その結果としては，先にも少し触れたように，低い計画達成率にとどまり，必ずしも十分な成果を挙げたとはいえなかったのである。

## 4. 朝鮮人労働力の移入と勤労報国隊

戦時非常増産の掛け声の昂進とともに，労働力逼迫は一層進行し，それに対応して当時の植民地朝鮮からの強制的労働力移入や勤労報国隊の組織化がはかられるようになった。

鴻之舞，手稲等他の道内金山への朝鮮人労働力移入は昭和14年9月の「朝鮮人労働者募集要綱」策定直後の10月上旬にすでに2度に亘っておこなわれている。すなわち，第1次移入は10月3日340名，第2次移入は10月6日512名，計852名が鴻之舞，手稲，轟，大盛，北隆，徳星，千歳各金山へと配属されたのである[54]。

静狩金山への集団的移入も，これら他の金山同様，昭和14年中にあるいは遅くとも15年1月中におこなわれた可能性は極めて高い。というのは，『特高月報』に昭和15年1月23日現在の静狩金山における「稼働朝鮮人数」が186名であるという数字が残っているからである。そして，彼等の要求の1つに，「入山と共に一人二十円の前借を認むる約束を果せ」という項目があるところからみて，入山間も無い人々であったに相違ないと思われるからである[55]。

ただし新聞資料によるかぎり，静狩金山への朝鮮人労働力の集団的移入は昭和15年3月から開始されたことになっている。

当時の新聞は，「半島の労務者　金山行き第一

50) この大会には6つの鉱山が参加しており，順位は手稲，静狩，珊瑠，銭亀沢，豊羽，鴻之舞であった。『北海タイムス』昭和17年5月2日付および3日付。拙稿「珊瑠金山」参照。なお，同年1月から3ヶ月間に渡って産報本部主催で全国皆勤実行運動なるものもおこなわれており，全国優良鉱山24（金属12，石炭12）のうち，本道の鉱山が10を占めたという（『北海タイムス』昭和17年7月21日付）。

51) 『北海道新聞』昭和18年1月13日付。記事では受賞者を，「銃後生産戦に敢闘する鶴嘴戦士のなかより特に殊勲甲に値する勤労者」と表現している。「勤労章」は炭山を含めて全道34氏に授与され，そのうち金属山職員は3名，金属山労働者は5名であった。

52) 『北海タイムス』昭和16年6月6日付。7日の日程は「長万部午前十時八分，静狩午前十時五十一分」となっている。

53) 同，昭和17年7月21日付。

54) 同，昭和14年10月4日付および7日付。

55) 『特高月報』昭和15年2月分，96-7頁。

陣　二十五日小樽上陸予定」という見出しで次のような記事を載せている。

「本道鉱山業者が結成し本部を手稲金山に置く北海道鉱山談話会では予てから労力飢饉を緩和すべく労務者を半島方面に募集中であったがこの程朝鮮全羅南道の農民九百五十名に対し募集契約を完了しその第一陣七百名は二十二日朝鮮釜山港を島谷汽船鮮海丸に便乗出帆し二十五日小樽へ上陸，手稲，鴻之舞，千歳，豊羽，静狩の各鉱山へ送りこまれることになり鮮海丸の定員が七百名であるため第一陣で来道し得ない残留二百五十名も今月末までには来樽するものと見られてゐる」[56]

しかし，実際には700名集まらず，そのためか予定は1日遅れて3月23日釜山出港，26日小樽に入港している。この時上陸した金山行きの朝鮮人は517名であった。「何れも揃ひの戦闘帽国防服に巻ゲートルといふ勇ましい姿で，手稲，鴻之舞，千歳，豊羽，静狩の各鉱山へ送り込まれて行った」と当時の新聞は伝えている[57]。

この517名のうち何名が静狩に配属されたか，残念ながら資料不足のため不明である。この後，残りの約400名も本道に上陸し，各金山に送り込まれたと思われるが，そのことに関する資料を発見することは出来なかった。

しかし，次いで（3月のを昭和15年当初からの「第1次」とすれば，これは「第3次」にあたる），昭和15年9月に約500名が函館に上陸した模様である。

新聞は，「本道金属山方面の労務者払底急を告げ増産遂行上一大支障を来してゐる折柄第三次半島労務者五百名がこの救援部隊として二十六日夜函館着の予定で来道，それより静狩，手稲，豊羽，鴻ノ舞，大金，北龍各鉱山へ夫々配属せしめられる」[58]と報じている。

同記事は続いて，関係当局では同年中更に1,400名の「半島戦士」を金山関係に移入予定であることを伝えている。

こうして増産の使命を担わされた朝鮮人労働力が続々と各地の鉱山へ移入され，静狩金山にもまた大量の導入があったと思われる。

終戦後，静狩へ戻ってきた唯一の朝鮮人孔山吉童氏によれば，最盛期静狩金山には約1,200人の朝鮮人が働いていたという[59]。この数字は従業員の約6割（従業員を2,000人と仮定）に相当するが，鴻之舞の1,646人，約4割，豊羽の455名，約5割という例と比較しても，それほど奇異な数字とはいえない。当時の静狩鉱業所長土屋裕も，「朝鮮の労務者も多く約1,000人，全労務者の半数くらいのこともあった」と述べている[60]。

孔山氏によれば，朝鮮人用の住宅は家族用の他に独身寮もたくさんあった，1棟8部屋，1部屋8畳に7人が入り，自分は第6飯場という所に入居していたという。

また，差別や逃亡に関して同氏は次のように語っている。

「削岩の仕事は1メートル掘って幾らという請負制であったので特に賃銀差別もなく，また生活上の差別もなかった。赤平，鴻之舞など他の鉱山と比べると静狩は暮らし安い所であった。しかし，中には空気の合わない人もいて何人か逃亡したのを知っている。捕ま

56) 『北海タイムス』昭和15年3月13日付。見出しには「第一陣」とあるが，前述の通り，道内への初移入はすでに昭和14年10月3日におこなわれている。したがって，ここでの「第一陣」の意味は，昭和15年に入って最初ということか。

57) 同，昭和15年3月27日付。同記事によれば，この時鮮海丸には新幌内行148名，砂川行112名，計260名の炭坑行朝鮮人も同乗しており，「二十六日午前の小樽港は総計七百七十七名の半島人部隊に異常な混雑を呈した」と報じている。

58) 同，昭和15年9月25日付。

59) 朝鮮名は孔吉童。同氏は大正7年1月京畿道高陽郡靖道面で生まれ，18才の時，したがって昭和11年頃，募集に応じ，村の17人とともに静狩金山に来て，最初3ヶ月間の訓練の後，坑内で削岩夫として働き，閉山後は終戦まで釜石で働いた。同氏のように，昭和14年の「募集」によってではなく，すでにそれ以前から来日して働いていた人もかなりいたように思われる。先の『特高月報』の数字の中にもそのような人が何割か含まれていたと思われる。

60) 『長万部町史』438頁。

ると頭坊主にされたりヤキ入れられたり大変な目にあうが，自分は東京へ逃げる二人を助けたこともある」と。

これでみると，朝鮮人に対する待遇はそれほど悪くなかったようであるが，しかし，同氏の場合，請負の出来高賃銀制の削岩夫であったことを考慮に入れる必要があろう。他の坑内外の職種に就いていた集団移入できた朝鮮人達の待遇は，それと決して同一でなかったと思われる。朝鮮人労働者について土屋所長でさえ，「彼らは仕事にもけんかにも強く，日本人の二倍くらい働いたが賃金は半分くらいであった。これは静狩だけでなくどこもそうであった」[61]と述べているのである。

『特高月報』には昭和15年1月に静狩金山において生じた1つの「紛争」が記録されている。

それによると，「紛争」は1月23日に発生し，「稼働朝鮮人」186名全員が「(1)昼弁当は腐敗せるものを食せしめ(2)入山と共に一人二十円の前借を認むる約束を果せざるは不都合なり」と2点に渡って抗議し，「怠業」行動に出た。これに対して会社側は「(1)弁当は七分搗米にて腐敗せるものにあらざるを説明し(2)前借は即時実行する旨言明」したところ，諒解が得られ，即日解決したというものである。そして，所轄署は朝鮮人労働者に対しては「団体行動の不可なるを訓戒」し，会社側に対しては「指導訓練に付警告」を与えたとある[62]。

この186名全員が昭和14年秋以降の集団移入で来たものか否かは不明であるが，要求を掲げ，全員で資本側に対決してゆく団結心に富む集団の姿勢からは，当時の朝鮮人労働者達の置かれていた切迫した状況が読みとれるのではないだろうか。

孔山氏の言にもあったように，「空気が合わない」等の理由で逃亡した朝鮮人も何人かいた。比較的労務対策がうまく行っていた千歳金山でさえ，逃亡や送還で「減耗」した割合は40%を超えていた(昭和17年6月末)。静狩の場合も，労務対策が良く行き届いていたとはいえ，他の鉱山の例に漏れない面があったと思われる。しかし，資料不明のため，それは推測の域を出ない。

逃亡や送還を防ぎ，契約更新を促進し，もって朝鮮人労働力の確保を持続するため，特に朝鮮および東京から「半島労務者督励班」なるものが来道したこともある。

すなわち，当時の新聞記事によれば，昭和16年9月24日から10日間に亘って，忠清南道朴社会課長，厚生省竹田事務官，内務省井出事務官，鉱山局田中事務官，拓務省小暮氏，金鉱連村雨労務部長等の諸氏が来道して，「半島労務者に鉱物増産の重要性を説き十月の契約更新期に当り再契約をなす様極力要請督励する」ため，手稲，豊羽，鴻之舞，雄別，千歳，静狩，大盛の七つの各金属山を巡った模様である[63]。

当時，各鉱山では従業員の2，3割から坑内作業では7割も朝鮮人労働力に依存しており，またいみじくもこのような督励班の派遣にも示されるように，労働力確保策における朝鮮人労働力の重要な位置付けをうかがい知ることが出来るのである。

次に，もう1つの労働力確保策であった勤労報国隊であるが，他の鉱山同様，静狩金山にも何度かに亘って入山している。

勤労報国隊は朝鮮からの強制的な労働力移入と同じく，労働力に対する国家統制の一環であり，戦争遂行上重要でない部門から必要な部門へと強権的に労働力の配置転換をはかるものであった。その意味で，繁忙期以外の農漁民のほか，主として都市の商工業者とその従業員等が狙い撃ちされたのである。

新聞資料によれば，静狩金山への勤労報国隊第1次導入は昭和16年夏にあったようである。

室蘭国民職業指導所が市内中小商工業者と各青年団体に鉱山への勤労報国隊の結成を促していたところ，7月に入って「室蘭商業青年同盟

61) 同上。
62) 前掲『特高月報』96-7頁。
63) 『北海タイムス』昭和16年9月17日付。

では二十三日夜理事会を開き市内団体のトップを切って勤労報国隊結成を決議し静狩金山へ労力救援に出動することになった」というものである[64]。

この時の人数や期間については不明であるが，他の例から勘案して，おそらく30名前後，40日間程度の規模であったと思われる。同じ頃，札幌や小樽でも商工業者による勤労報国隊が組織され，千歳，手稲，豊羽等の各鉱山へ8月初旬から40日間の予定で入山している。

この勤労報国隊は厚生省のいわば行政指導にもとづいて開始されたものであるが，その法制化ともいうべき「国民勤労報国協力令」が昭和16年11月22日に公布されると，今度はそれにもとづいてより大規模かつより強権的に勤労報国隊が組織されるようになった。そのことを示すものとして，次のような新聞記事がある。

「今回道庁では本年度第一期鉱山国民勤労報国隊として各地から主に商業報国隊その他総動員業務に従事してゐない商業団体（地方によっては一部青年団員を含む）千五百名を動員，全道の石炭山，金属山に出動せしめることになり四日各地市町村長，団体長等の編成者あて報国隊編成命令を発した」[65]

この「命令」によって道内各都市の商工業者で編成された勤労報国隊は総勢1,530名に達し，それぞれ道内の各炭山，金属山へと配置されていった。期間は昭和17年5月10日から6月18日までの40日間であり，静狩金山へは森から30名が入山したようである。

さらに，その2ヶ月後の7月15日頃に道庁から各編成責任者に対し，第2期勤労報国隊の「出動命令」が出されている。これは，第1期の人数を約600名上回る総勢2,120名にものぼる人員を全道から狩り集め，7月20日頃から40日間，各鉱山へ派遣せよというものであった。静狩金山にはこの時，江差から40名，余市から10名，計50名が入山した模様である[66]。

時，折しも「戦時金属非常増産強調期間」の最中であり，これら勤労報国隊は朝鮮人労働者を含む金山の全従業員と共に，気狂いじみた国家主義的全体主義的な増産運動の渦中に，その一翼を担う統制された労働力として動員されていったのである。

### 5. 静狩金山における鉱災害問題と静狩原野天然記念物指定解除の顚末

まず，静狩における鉱災害問題についてみてみよう。

『北海道鉱業誌』大正13年版，昭和3年版，同9年版はそれぞれ静狩金山における「公害問題」について次のように述べて，問題は全く無かったかの如くである。

「坑内ヨリノ捨石ハ一定ノ研捨場ニ堆積シ製練場ヨリノ鉱泥（スライム）及浸出槽ヨリノ捨石ハ同ジク研捨場ニ放棄スレドモ其面積広濶ニシテ散逸ノ憂ナシ。

排水ハ一分間八立方尺ニシテ鉱滓ヨリノ浸出水ト合シ長サ六十尺，幅十二尺，深サ三尺ノ沈澱池ニ導キ其上澄ヲ静狩川ニ放流スルモ此下流僅ニ七・八丁ニシテ海ニ注グガ故ニ公害上支障ナシ。」（大正13年版，351頁。傍点は引用者）

「完全なる沈澱池を設け公害の虞なし」（昭和3年版，415頁）

「当製練所の廃棄物は廃水及鉱滓の二種とす。廃水は選鉱場のドアー濃縮槽のオバーフローのみにして其量は毎分約四立方呎に止り毒物を全然含まざるのみならず殆ど清水に近きものなるを以て適宜の場所へ最短路をとらせ不絶放水せしむ。鉱滓は（中略－引用者）青化場第二次ハリバーフィルターに依り充分清水を以て洗滌せられたるケークにして毒物は含まず，而も特に水分を絞りたるケークのまゝをベルトコンベアーにて搬送堆積するも

64) 同，昭和16年7月26日付。
65) 同，昭和17年5月5日付。
66) 同，昭和16年7月12日付。

のなるを以て之に因りて起る影響の顧慮は全然必要なきものと認む（以下省略－引用者）」（昭和9年版，454～5頁，傍点は引用者）

しかし，「完全なる沈澱池」があるとはいえ，青酸塩の混じった廃水を「最短路」をもって海に極めて近い川に流しており，何らの問題も生じてこなかったとはとても考えられない。

実際に，すでに昭和5年において2度にわたって問題が発生している。

この年，3月28日と5月12日の2度，静狩住民の要望によって北海道水産試験場が排水の調査をしている。その分析結果は次表の通りであった。

第2回目の分析結果をもとに，河口から上流500 mの静狩川本流における青酸カリ含有量を

表5　静狩金山排水の成分

| | 第 1 回 | 第 2 回 |
|---|---|---|
| 採水年月日 | 昭和5年(1930) 3月 | 同年5月 |
| 外観 | 著しく混濁，暗褐色 | 少しく白濁 |
| 性 | 強アルカリ | pH 6.7 |
| 青酸塩（KCNとして） | 2.96 ppm | 6.47 ppm |
| 水量 | － | 13.92秒立 |

（出典）　五十嵐彦仁『北海道に於ける鉱工業排水と水産被害調査及び研究』楡書房，昭和31年11月，245頁より。

計算すると1立方m中0.77mg余であり，これはヤマベの致死極量の5倍余に相当するほど毒性の強いものであった[67]。

住民要求にもとづく排水調査は，同試験場によってその後，昭和10年5月，同15年2月，同17年3月にもおこなわれており，相当深刻な問題が操業規模の拡大につれ，何度も生じたことを物語っている。

昭和10年の「鉱毒問題」に際して，鉱山側は沿岸零細漁民の慰撫と救済という形をとって「静狩水産組合」を設立し，鉱毒流出について苦情を申し立てている他の漁業者に対立させるという姑息な手段をとっている。そのため，当時の新聞は「鉱毒異変」という表現を使い，「大漁業者側に鉱業所が応戦　資金を貸与し沿岸漁民を集中　紛争益々深刻化」という大見出しで当該問題を伝えている[68]。

しかし，問題は一向に解決されず，水産試験場の昭和15年2月の調査時には次のような事実が記録されている。

「（1）昭和14年（1939）3月頃に殻高4.5糎位の北寄貝殻が無数に打寄せられた。

（2）同年4～5月頃に「イサダ」の斃死

（3）同年7月頃に鮭，玉筋魚，片口鰯等の斃死したもの多数打寄せられた。

（4）同年10月頃「ソイ」の混濁海面（滝の下附近）に浮上苦悶しているもの多数打寄せられた。

（5）同年12月頃鰊の斃死せるもの多数打寄せられた。

（6）同年12月以降川尻附近で半死せる北寄貝の打揚げられた事数回に及んだ。

（7）同15年（1940）1月（22日）約1,000箇の北寄貝が打揚げられた。」[69]

この件に関するものか，あるいは別件か不明であるが，札幌鉱山保安監督局資料によれば，「鉱さい沈でん池から鉱さいが溢流し，海に流出したため漁業に被害を与え，10,000円の賠償で解決」という鉱害事件が記録されている[70]。発生時期は昭和16年となっているので，おそらくこれは昭和15年の調査とは関係が無く，この年5月から7月に渡っておこなわれた全国的な金属増産運動の結果である可能性が高い。

さらに，昭和17年3月にも同試験場による被

67) 五十嵐彦仁『北海道に於ける鉱工業排水と水産被害調査及び研究』楡書房，昭和31年11月，245頁。

68) 『旭川新聞』昭和10年9月7日付。この「水産組合」の組合員は36名，大型川崎船9隻，小型天満船4隻を建造し，鰯流網，這縄等を購入，組合設立資金として鉱山側が1万1千円を2年据置で貸与，8年年賦償還という契約内容であった。

69) 五十嵐，前掲書，251頁。

70) 札幌鉱山保安監督局資料「金山における鉱害発生状況」。

害調査がおこなわれている[71]。

調査は3月5，6日の2日間に渡っておこなわれたが，調査技師達が到着した4日には夥しい数の鰈類の斃死魚体が散乱し，この2，3日間に海浜に打揚げられた斃死魚類も数多く，中には沖合の海底に棲息する種類も混在し，30cm程度の大形鰈もあったという。

金山側はこの調査に備えて，欺瞞的にも土堰堤の欠壊場所を修築したり，水泥化した鉱滓を直接川へ放流するための箱樋を一時的に閉鎖したりして，糊塗策に汲々としていたが，それにも拘らず汚染度は極めて高いものであった。

有害，有毒の水泥（水泥化した鉱滓）が箱樋，フューム管，暗渠，土堰堤の欠壊場所等を通じて直接放出される静狩川支流松縄沢の河底は，そのほとんどがおよそ河川とはいえないような泥濘層で埋まり，鉱山の沈澱池と何らかわらず，その泥は丁度，「泥火山の盛り上りつつ流動する」ような凄まじい状況であった。

河口近くの泥土層の厚さは1mにも達し，「徒歩渡渉を試みたが泥濘に沈没して歩行不可能」となり，「泥層に没入した長靴を持上ぐる事さえ容易でなかった」のである。

「其の暴状は何人と雖も許容出来ないであろう」と，調査に当った五十嵐技師等は無きに等しい欺瞞的な排水対策を暴露し，激しい憤りをもって報告を認めている。

河口付近の水質検査の分析結果は次表の通りであった。

**表6**　静狩川の水質（昭和17年3月）

（数字は ppm）

| | |
|---|---|
| pH | 10.2 |
| 青酸塩（KCN として） | 4.39 |
| 泥　　土 | 1,517.0 |
| 内無機物質 | 1,484.0 |
| 石　灰（CaO として） | 53.70 |

（出典）　五十嵐彦仁，前掲書，249頁より。

71) 五十嵐，前掲書。以下の叙述は主として同書による。

すなわち，青酸塩はヤマベの致死極量の約30倍，嫌忌極量の200倍余にも達し，石灰も致死極量を超え，嫌忌極量の7倍余に相当するものであった。

そして，調査報告は夥しい魚貝類の斃死の原因を鉱山排水中の青酸塩によるものと断定し，さらに表7・8のように排水による漁業被害の損害高を計算している。

**表7**　静狩漁業協同組合地区内の浅海損害高（貫）

| | 1ヶ年被害高 | 生長年数 | 損害高 | 総計（昭13～18） |
|---|---|---|---|---|
| コンブ（干） | 261.8 | 1 | 261.8 | 1,832.6 |
| ワカメ（生） | 703.7 | 0.83 | 584.0 | 4,806.2 |
| フノリ（干） | 194.2 | 1 | 194.2 | 1,359.4 |
| ギンナンソウ（干） | 817.2 | 0.5 | 408.6 | 5,311.8 |
| マツモ（生） | 170.5 | 0.4 | 68.2 | 1,091.2 |
| アマノリ（生） | 76.1 | 0.4 | 30.4 | 487.0 |
| タコ | 957.0 | 4.5 | 4,306.5 | 10,048.5 |
| ウニ | 141.2 | 2 | 282.4 | 1,129.6 |
| ナマコ | 137.9 | 3 | 413.7 | 1,241.1 |
| ホッキ貝 | 6,000.4 | 3.5 | 21,001.4 | 57,003.8 |
| カレイ | 375.2 | − | − | 2,251.2 |
| アブラコ | 221.4 | − | − | 1,328.4 |
| カヂカ | 580.6 | − | − | 3,483.6 |

（出典）　同上，255頁より。

**表8**　同地区内洄遊魚の損害高（貫）

| | 年平均被害高 | 総計（昭13～18） |
|---|---|---|
| 鰛 | 12,940.5 | 77,643.0 |
| 小鰊 | 3,292.4 | 19,754.4 |
| 鮭 | 193.4 | 1,160.4 |
| 鯖 | 8,677.1 | 52,062.6 |
| 鮪 | 7,796.2 | 46,777.2 |
| 柔魚 | 2,522.4 | 15,134.4 |

（出典）　同上，256頁より。

これらを単純に合計すれば303,906.4貫になり，これはまた相当な金額に達したものと思われる。この補償問題や，あるいは報告がこの災害の最大の問題点として指摘している「鉱滓の水泥化放流」の「絶対中止」という提言を巡って，如何なる対策が講じられたのか，あるいは

如何なる紛争が生じ，それが如何なる経緯をたどったのか，知りたいところであるが，残念にも不明である。

しかし，おそらくこの後9月に再び同様の問題が惹起したことや，閉山間際の大増産運動中であったこと等から勘案すれば，鉱害問題の解決をみることもなく，鉱山側は「我が亡き後に洪水は来たれ」の姿勢のまま閉山にともなう撤退，資本の引き揚げをしていったものと推量される。

9月の問題というのは，依然として水泥の放流を止めないために，河口から約1㎞を距る静狩駅下の海浜に至るまで大量のホッキ稚貝が斃死したというものである。技師は毒死の時期を8月中～下旬と推定している。すなわち，この問題は同年7・8月に実施された「戦時金属非常増産強調期間」のもたらした1つの結果だったのである。金属の増産運動の影で漁業が，また魚貝類がその犠牲となったのである[72]。

ところで，静狩原野の湿地帯は大正11年10月12日に天然記念物保有地に指定され，その600町歩におよぶ「水蘚泥炭地」は泥炭湿地特有の珍らしい植物群落のある所としてよく知られていたが，昭和13年の製錬所拡張後，その一部約170町歩が「鉱毒沈澄池」，鉱滓捨場として狙われることになった[73]。

昭和13年11月に開催された長万部村議会は原野の天然記念物指定を解除し，鉱山に貸与するため「国有未開地売払出願」と「天然記念物保存の解除出願」を議題にのぼせ，3日間の論議の後，強硬な反対意見を述べていた漁業関係議員の1人が辞職するという波乱含みの中でその議案が可決されていく[74]。

他方で金山側も道庁や文部省に陳情を続け，札幌鉱山監督局長が上京して文部省天然記念物保存委員会で指定地域の取消方を要請するという運動もしている[75]。

昭和14年8月23～24日には道庁および札幌鉱山監督局の技師等3名が現地調査に入った[76]。

このような経過をたどって，ついに昭和15年1月，静狩湿地帯は天然記念物の指定を解除されることになった。当時の新聞は，「静狩泥炭形成植物群落　金に逐はれ鉱滓捨場に」という見出しで次のように報じている。

「(長万部発) 長万部村から内務省に申請中の静狩泥炭形成植物群落百七十二町七反八畝八歩三合は二十二日附官報をもって天然記念物指定を解除されたが右泥炭植物群落は離島大島のおほみづなきどりと共に史蹟伝説に恵まれた道南渡島の貴重な学術的参考資料として毎年遥々内地から見学に訪れる学究者が多数あるので金増産の犠牲となって消滅することは関係方面から非常に惜しまれているが同村では今後同地を膨脹して来た静狩金山の鉱滓捨場とし自然の客土によって得た埋立地に主畜農業者を入地させ牧畜業を営ませる一石二鳥案を以て進むことになった」[77]

すなわち，同年1月22日付で静狩原野172町歩余は天然記念物指定を解除され，長万部村としてはそれを鉱滓捨場として静狩金山に貸与し，合わせてその埋立地を牧畜に利用するという計画であった。

しかし，それから約2年後の昭和17年3月になっても，そこは鉱滓捨場として使用された形跡はない。先の水産試験場技師の報告に，「本調査に当り意外とする所は未だ本泥炭地に於て何等の施設なく，実施の準備すら無きものの如し。鉱滓放棄の余地なしと説明せられて之が開放に協力したる当局の人々に対しては心外の一

72) さらに報告は，静狩沿岸への鯨や鮪の死体漂着，小鮪の斃死，放牧中の小牛や畜犬の斃死という証言をあげ，「汚水に含有する青酸塩量から推論して是等を否定は出来ない」としている。

73) 『旭川新聞』昭和14年7月28日付。見出し「静狩の水蘇泥炭地に産金国策の鶴嘴　天然記念物指定地の開放陳情」。

74) 『長万部町史』439-442頁。

75) 『北海タイムス』昭和14年11月3日付。見出し「金増産の猛攻撃に天然記念物も敗北　静狩泥炭形成植物群落取消か」。

76) 『旭川新聞』昭和14年8月27日付。見出し「お花畑も…〝国策〟に手折らる」。

77) 『北海タイムス』昭和15年1月25日付。

事たるを失はざるべし」[78] とあり，そのことは明らかである。

金山側はその理由として，「施設に対する機械の輸入不可なる為」と釈明しており，また実際に天然記念物指定を解除されたものの未開地としての処分は条例によって50町歩に限定され，その許可された50町歩というのは「泥炭地泥土の泥深き一種の谷地にして，堰堤を築くべき基盤を欠」き，したがって沈澱池構築には「全く不可能」の場所だったようである[79]。

このような事情で沈澱池の建設は見送られたようであるが，しかし，いわばその予定沈澱池の北西数百メートル，製錬所から約2.5㎞の所には索道によって鉱滓が放棄されていた。

そこは「現在の静狩開拓地14号排水の山際」であったが，そこには残滓の小さなズリ山が形成された。後に，このズリを客土に利用することが考えられたが，しかし，ズリは「微粒状のもので乾けば飛び，ぬれればすべる性質をもっていて，ほかの土とまぜ合わせでもしなければ使えない」ため，利用されることはなかった[80]。すなわち，ズリを客土にして泥炭湿地を牧草地に変えるという村の思惑もはずれたことになる。「泰山鳴動して鼠一匹」。結局，長万部村や静狩金山が政府に申請，陳情してようやく静狩原野が天然記念物指定から解除されたものの，皮肉にも，戦争に帰因する建設資材の輸入不能や破壊の対象となった泥炭湿地のもつ特性自体によって，原野は大きな破壊を免れることが出来たのである[81]。

## 6. 静狩金山における死傷事故等

ここでは静狩金山において発生した事故等についてみることにしよう。

住友との合併以前における事故発生については今のところ不明であるが，それ以後，すなわち昭和9年以後については毎年のように何らかの死傷事故が生じ，犠牲者の記録も残っている。それらの事故および判明している犠牲者を次に列挙する。

昭和9年2月13日，ダイナマイトの爆発により工夫5名が重傷を負った。この事故は，「静狩金山採鉱所においてダイナマイト十八本を使用して破壊作業中内一本の不発あったのを知らず工夫がツルハシを以て打込むと突然爆発し付近において作業中の工夫五名は何れも瀕死の重傷を負ふた」[82] というものである。

昭和10年には3件の死亡事故が発生している。

1月19日，「漏斗ニ墜落」して奥野三太郎（鉱夫）が死亡

4月12日，同様の事故で佐々木福松（同）が死亡

6月4日，「製錬磨鉱機械ノベルトニ捲込」まれて向井友吉（同）が死亡，というものである[83]。

昭和11年には4件の死亡事故が発生した。

6月9日，「斜坑道ニテ発破」のため藤沢正巳（鉱夫）が死亡

同月22日，「作業中落磐」のため佐藤満男（同）が死亡

8月9日，同様の事故で佐々木ウメ（同）が死亡

78) 五十嵐彦仁，八田良逸「静狩金山排液に就て」『北海道水産試験場事業旬報』第535号，昭和17年7月，14頁。

79) 同上。なお，この資料では指定解除の面積は272町歩となっている。

80) 『長万部町史』442頁。

81) しかし，こうして折角破壊されずに済んだ静狩原野は，戦後の開拓開発によって排水路が作られて，結局は破壊され，元の姿をとどめることは出来なかった。

82) 『旭川新聞』昭和9年2月14日付。この他，同，昭和9年7月17日付には殺人未遂事件が報道されている。坑夫出雲久之助（36才，本籍秋田県）が飯酒し，仕事のことで口論，同僚の坑夫佐藤房二（33才）を短刀で刺したというものである。

83) 『殉職産業戦士名簿』昭和15年12月，35-6頁より。以下，昭和14年分まで同じ。なお，昭和9年4月から同11年4月まで静狩金山の下請名取組で坑内外作業に従事していた佐藤光顕氏は，静狩にいた間に漏斗への転落事故で2名ほど死んだことがあったと述べており，資料の裏付けとなっている。

10月24日，「充塡作業中硐崩落」で森賢一（同）が死亡

というものである。8月に落盤で死亡した佐々木ウメは18才の婦人であり[84]，若年の婦人労働が選鉱ばかりでなく，坑内作業にもあてられていたことを物語っている。

昭和12年には2件発生している。

1月27日，「天磐崩落」のため渡部金太郎（鉱夫）が死亡

10月24日，「作業中火薬点火ノ際逃ゲ遅」れて池添千代吉が死亡

というものである。10月の事故は，当時の新聞にも次のように報じられている。

「火薬爆発して坑夫即死（札幌発）二十四日午後零時四十分頃長万部村静狩鉱山の採坑夫池添千代吉（二六）は八番坑で作業中，火薬爆発し即死した」[85]と。

昭和13年には1件，11月8日，「切上リ支柱作業中落盤」が生じ，細川石太郎（鉱夫）が死亡している。

昭和14年には4件の事故が発生した。

1月11日，「製錬磨鉱機械ノベルトニ捲込」まれて寺島義夫（鉱夫）が死亡

同月24日，「充塡作業中硐崩落」のため堀越繁雄（同）が死亡

3月23日，「支柱作業中硐崩落」のため岩崎保一（同）が死亡

9月5日，「天盤崩落窒息」のため山口由太郎（同）が死亡

というものである。昭和9年から同16年2月まで静狩金山で電機関係の仕事に従事していた栗原春松氏によると，昭和14年ころ，ボールミルの中で修理中の人が，当時3交代制で丁度出勤してきた人に誤って機械のスイッチを入れられ，首を切断されてしまったという事故があった。これは，おそらくここに記載されている1月11日の事故ではなかったかと思われる。

その他，昭和17年の金山神社創設時にダイナマイト爆発事故が発生している。

当時，警防団長および約300名の朝鮮人労働者の監督をしていた平野虎二が，10月13日，神社遷宮に際して御手洗石を下す作業中，発破が暴発して負傷，左目，左手首，何本かの歯を失い，右手は親指以外損壊を受けるという重傷を負ったが，奇跡的に生命は助かったというものである[86]。

栗原氏や金子喜代之輔氏（昭和9年から18年の閉山まで経理係として勤務）によれば，この時，平野氏の他2人ほど重軽傷を負ったという。

最後に，これは事故とはいえないが，鉱山はなやかなりし頃，若い職員が洞爺湖温泉の芸者に失恋して青酸カリ自殺，大がかりな捜索の結果，死体は洞爺湖沿岸の山中で発見されたという事件もあった[87]。

以上にみてきたように死亡事故はほとんど毎年発生している。死亡者氏名は『殉職産業戦士名簿』によったものであるが，これはまだ昭和15年現在のものである。増産運動が激しく展開された昭和16・17の両年においてはおそらく以前にも増して多くの死傷事故が発生したのではないかと思われるが，残念にも資料は存しない。

なお，北海道開拓殉難者調査委員会の調査によれば，静狩金山における「殉難者」（死亡者）は34名にのぼっており，このうち『殉職産業戦士名簿』の14名を含む18名の氏名が判明している[88]。

84) 北海道開拓殉難者調査委員会，開拓殉難者調査書付票乙号「静狩金山」および主任調査員堅田精司氏による。

85) 『旭川新聞』昭和12年10月26日付。

86) 故平野虎二の子息，勇氏および加藤至昭氏による。なお，勇氏によれば，虎二は鉱山病院で応急処置を受けた後，函館市立病院に翌年3月末まで入院。しかし，その後右目も失明状態となり，退職金（3,000円）を使って函館江口眼科で3回ほど手術，ようやく眼鏡匡正で0.08（裸眼0.003）まで視力回復したという。

87) 金子喜代之輔氏による。

88) 北海道開拓殉難者調査委員会「調査情報」第4号，1984年12月，添付資料より。なお，堅田氏によると，氏名判明している残りの4人に朝鮮人は含まれていない。

## 7. 閉　山

昭和7年以来の金増産政策は米国をはじめとする国々からの軍需物資輸入のための国際決済手段としての金の必要性にもとづくものであったが，昭和16年12月の太平洋戦争への突入はそれらの国々との貿易途絶を惹起し，世界貨幣としての金の意義を低下させ，したがって政府の金政策はその転換を迫られていたといえる。太平洋戦争での日本の敗退への転機となった年ともいわれる昭和17年に入ってもなお，前述のようにその夏の二ヶ月間，「戦時金属非常増産強調期間」が設けられ，金をも含む金属の大増産運動が依然として繰り広げられていたが，ようやく同年秋になって政府は当面不要となった金鉱業の労働力，機械設備等の全てを他の戦時重要鉱業へ配置転換するという意向を見せるようになり（昭和17年10月22日「金鉱業及錫鉱業ノ整理ニ関スル件」第1次閣議決定），それは翌18年1月22日「金鉱業ノ整備ニ関スル件」の第2次閣議決定を経て，同年4月の金鉱業整備，全国の金山の休廃止が決定されていくのである。

静狩金山もまた他の金山同様，閉山を避けることはできなかった。同山の場合，昭和17年12月に土屋所長が当時の商工大臣岸信介に呼ばれて上京し，鉱山統制会北海道支部長を兼ねていた土屋に対し，鉱山統制会が自主的に閉山する形をとって貰いたいという要請を受けたという。そしてその結果，土屋は「閉山については道の商工関係，治安については警察部と話合いの上秘密のうちに計画を進めた」とある[89]。

静狩金山は，こうして昭和18年4月1日，閉山を迎えることになった。

閉山式は体育館でおこなわれ，土屋所長は涙声で閉山に至る事情を説明したといわれる[90]。

静狩金山株式会社『閉山記念』（アルバム）には住友前総理事小倉正恒の次のような漢詩が掲げられている。

急須戦力大増強
企業應時要易方
倏忽離山豈無涙
請徯完捷解愁腸

同様の詩は鴻之舞鉱山の休山式においても紹介され，河井監事がその解説をした後で次のように述べている。

「私はこの最後の一句，この戦ひに勝ち抜いて，以てこの悲しみを晴らさんと言ふ所に，小倉さんが吾々に対し特にこの詩を下さった真の気持があると思ひます。吾々はこの悲しみを悲しみとしてはならないのであります。吾々はこの悲しみを転じて以て米英撃滅の決意を新にせねばならないのであります。さうしてこの鴻之舞の従業員の最後の一員に至る迄，この鴻之舞の資材の最後の一片に至る迄，一日も早く国家の要望する産業戦線に再起せしめ，生産の飛躍的増強を計って，以て仇敵米英を『撃ちてし止まむ』ことを誓はねばならないのであります」[91]と。

これが休山式における告辞である。当時の雰囲気がよく伝わってくるであろう。ここでの鴻之舞を静狩に置き換えて，おそらく静狩においてもほぼ同様の告辞があったものと思われる。すなわち，静狩金山は閉山のやむなきに至ったが，その悲しみや無念を「米英撃滅の決意」に変え，金山の労力，資材を他の重要鉱業に転換して，「仇敵米英」を「撃ちてし止まむ」というようなものである。

静狩金山における労働力の転換，移動は4月3日から開始された。最も多かったのは釜石への約800人で，他は別子，国富，上ノ国等全国の鉱山へと散っていった[92]。朝鮮人労働者達は

89) 『長万部町史』437-8頁。なお，自主的という言葉は，ここでは官僚得意の責任回避手段として使用されているようである。
90) 前出，加藤氏による。
91) 「鴻之舞鉱山休山式に於ける河井監事告辞」『井華』第8号，昭和18年7月，16-7頁。
92) 『長万部町史』438頁および本間スマ，トシエ氏による。

表9　静狩金山休山による児童の転退　　－昭和18年度－

| 学年＼月 | | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 初1 | 男 | 4 | 3 | 5 | 13 | 16 | 2 | 14 | 4 | 0 | — | — | — | 61 |
| | 女 | 7 | 3 | 7 | 7 | 13 | 4 | 19 | 7 | 1 | — | — | — | 68 |
| 2 | 男 | 11 | 6 | 7 | 12 | 17 | 4 | 11 | 6 | — | 1 | 1 | 3 | 79 |
| | 女 | 7 | 4 | 8 | 17 | 15 | 2 | 7 | 2 | — | 1 | 1 | 3 | 67 |
| 3 | 男 | 5 | 5 | 2 | 10 | 17 | 4 | — | 3 | — | — | — | 4 | 50 |
| | 女 | 3 | 6 | 4 | 8 | 14 | 9 | 3 | 1 | — | — | — | 1 | 49 |
| 4 | 男 | 4 | 4 | 1 | 9 | 6 | 3 | 8 | — | — | — | — | 2 | 37 |
| | 女 | 5 | 4 | 11 | 12 | 4 | 1 | — | 5 | — | — | — | 2 | 44 |
| 5 | 男 | 6 | 6 | 3 | 4 | 6 | 1 | 2 | 4 | — | 2 | — | 1 | 35 |
| | 女 | 5 | 3 | 2 | 5 | 9 | 1 | 7 | 1 | — | — | 1 | 1 | 35 |
| 6 | 男 | 4 | 4 | 6 | 7 | 7 | 2 | 3 | 4 | — | — | — | 1 | 38 |
| | 女 | 3 | 4 | 5 | 2 | 11 | 2 | 2 | 3 | — | 1 | — | 1 | 34 |
| 高1 | 男 | 1 | 6 | 3 | 6 | 10 | 3 | 2 | 2 | — | 1 | — | 2 | 36 |
| | 女 | 3 | 1 | 4 | 7 | 8 | 2 | 1 | 1 | — | — | — | — | 27 |
| 2 | 男 | 2 | 2 | 5 | 5 | 6 | 1 | 1 | 4 | 1 | 1 | — | — | 28 |
| | 女 | 2 | 3 | 0 | 0 | 5 | — | 9 | 3 | — | — | — | — | 22 |
| 計 | | 72 | 64 | 73 | 124 | 164 | 41 | 89 | 50 | 2 | 7 | 3 | 21 | 710 |

（出典）静狩小学校開校80周年記念協賛会記念誌部会『静狩校』昭和57年9月，30頁より。

孔山氏のように，そのほとんどが釜石へ転勤となったようである。

間接的ではあるが，静狩小学校の昭和18年度児童数の月別異動（減）によって閉山による労働力移転の推移をうかがうことが可能である（表9参照）。

すなわち，静狩小学校の児童数減少は昭和18年4月の72名に始まって，7月124名，8月には164名にも達し，後11月まで数10名規模の減少が続き，12月以降急に少なくなって一桁台にまで至っている。これは，7，8月の夏を移動のピークとして，12月に入る頃までにほとんどの従業員家族が移動し終えたことを示すものとみてよいであろう。

それにしても，単年度で約700名にもおよぶ児童が静狩を去っていったのである。閉山がいかに慌しくて凄まじい出来事であったか，政府の勝手な金政策に翻弄される有様が眼前に思い浮かぶようである。

他方，資材等は小坂鉱山その他へと転用されていった。独身寮は虻田役場建物の一部として，また，鉄骨建材の一部は虻田にあった海軍施設に転用され，そこは現在でもレンガ工場として利用されている[93]。また，金山の体育館は北海道勤労訓練所となり，徴用工の訓練のために利用された[94]。

ところで，閉山の際，先の河井監事が静狩に立ち寄り，土屋所長と会っている。その時，河井が住友の金鉱業もいよいよこれで終りだと言ったのに対して，土屋は，「国家の至上命令で北海道を引上げるんですが，何時かは必ず帰って来ます。設備が徹去されたのは仕方がないとしても，埋蔵鉱量まで持って行けないのだし」云々と応えたそうである[95]。

93) 金子および栗原氏による。
94) 前掲『静狩校』19頁および『郷土誌』59頁。
95) 久保田定二，土屋裕「鴻之舞鉱山の想い出」（未

表10 静狩金山の鉱量調査結果

| 鏈別 | 鉱量（t） | 金 | | 銀 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 品位（g・t） | 含有量（g） | 品位（g・t） | 含有量（g） |
| 本鏈 | 3,800 | 8.0 | 30,400 | 95 | 361,000 |
| 新脈 | 7,850 | 9.0 | 70,650 | 90 | 706,500 |
| 五百尺鏈他 | 6,300 | 10.0 | 63,000 | 100 | 630,000 |
| 前鏈 | 630 | 8.0 | 5,040 | 95 | 59,850 |
| 重別七号鏈 | 9,870 | 8.0 | 78,960 | 88 | 868,560 |
| 寿老九十一号鏈 | 26,000 | 8.0 | 208,000 | 88 | 2,288,000 |
| 来馬旭鏈 | 2,350 | 8.0 | 18,800 | 120 | 282,000 |
| 計 | 56,800 | 8.4 | 474,850 | 92 | 5,195,910 |

（備考）昭和17年5月最終鉱量調査の数字を基礎として，含金品位4g・t以上の鉱量の60%を本表鉱量として，品位は各々約2倍として計算したもの。
（出典）静狩青年団『郷土誌』昭和22年8月，59-60頁。なお原表では金の品位に全て少数点が打ってないが，誤りと思われる。

これは勿論，一般的な言い方であると同時に，鴻之舞の埋蔵鉱量について述べたものと思われるが，昭和17年5月の最終鉱量調査によれば，もはや静狩の場合，その埋蔵鉱量はそれほど豊かな数値を示してはいない。

すなわち，表10に明らかなように，総量で56,800トンでしかなく，そこから金を抽出してもせいぜい500 kgにも満たないような水準であった。しかも，表の備考にあるように，本表の数字は実際の鉱量の60%とはいえ，品位は2倍にみて計算しているのであり，抽出金量はさらに低下することは明白である。

このことは，戦後の静狩金山再開の可否を判定し，そのありようを想像するに充分な資料ともなっていたのである。

前述したように，静狩金山はすでに昭和17年11月27日から日本産金振興株式会社の経営に委ねられていたが，昭和18年4月30日，日本産金振興が帝国鉱業開発株式会社に吸収合併されるにともない，静狩閉山後の整理精算は帝国鉱発によっておこなわれることになった。そして，昭和19年10月28日付で鉱業事務所の廃止届が提出され[96]，ここにその終焉を迎えたのである。

## III 戦後の静狩金山
## —— 結びにかえて ——

戦後になって2度再開が試みられ，わずかの生産をみたものの，2度とも約2年ほどで繰業を停止している。

最初の再開は土屋裕前所長によって進められた。計画段階においては，表11のような収支計算がなされていた。

すなわち，金の平均品位 8.5g/t の粗鉱を1日当り50トン採掘し，売鉱すれば，年間利益56,000円余が生ずるというものである。

こうした計算を踏まえて，土屋は旧職員数十名とともに静狩へ戻り，金山の再開準備にとりかかった[97]。しかし，敗戦後の産業界全体が虚脱状態に陥っており，「各種の状況は転用によって破壊された静狩に於て全く金山再開の期待から裏反する方向えと進んだ」ため，経営方針を一変せざるを得なくなり，製塩，畜産，農耕，開墾，加工等の構想をもった多角事業の経営へと入っていった[98]。しかし，これらの事業は，「再開時節の到来を待つ間の生活維持手段」[99]

定稿）昭和32年6月，20頁。
96）札幌通産局鉱山部資料。
97）前掲『静狩校』20頁。
98）同，『郷土誌』65-6頁。
99）同，『静狩校』20頁。

**表11** 採鉱および売鉱計算

| (1) 採鉱 | | | 金 | | 銀 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 区別 | | 採掘鉱量(t) | 品位(g・t) | 含有量(g) | 品位(g・t) | 含有量(g) |
| 1日 | | 50 | 8.5 | 425 | 95 | 4,750 |
| 1月(25日) | | 1,250 | 8.5 | 10,625 | 95 | 118,750 |
| 1年(300日) | | 15,000 | 8.5 | 127,500 | 95 | 1,425,000 |
| (2) 売鉱計算 | | | | | | |
| 収入 | 採収率 | 金 | 127,500g×97%= | 123,700g | | |
| | | 銀 | 1,425,000g×89%= | 1,268,000g | | |
| | 価額 | 金 | 123,700g×17.00円= | 2,102,900円 | | |
| | | 銀 | 1,268kg×310.00円= | 393,080円 | | |
| | | | 計 | 2,495,980円 | | |
| 支出 | 熔錬及粉鉱処理費 | | 15,000t×(11.50×5)= | 862,500円 | | |
| | 精製費 | 金 | 123,700g×(0.07×5)= | 43,295円 | | |
| | | 銀 | 1,268kg×(3.00×5)= | 19,020円 | | |
| | 鉄道運賃 | | 15,000t×7.00 | =105,000円 | | |
| | | | 計 | 1,029,815円 | | |
| 差引収入 | 2,495,980−1,029,815=1,466,165円 | | | | | |
| 営業費を差引けば，差引利益金56,075円となる。 | | | | | | |

（出所）前掲，『郷土誌』63-4頁より。なお，明らかな数字の誤りは訂正してある。

として位置づけられていた。

再開計画時，1g17円であった金「価格」（政府買上げ価格）は次第に高騰し，昭和24年7月には385円にまで騰貴するという状況の中で，いよいよ再開の気運が盛り上り，同年8月に坑内取明作業が開始された。同年11月7日には戦後初の鉱業事務所設置の届出が札幌通産局に出され，12月1日，その鉱業代理人として土屋裕が届出を受理されている。

昭和25年1月からの産金量は表12のとおりであった。

**表12** 静狩金山の産金量（昭和25年）

| 月 | 粗鉱 | | | 精鉱 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 鉱量(t) | 品位(g/t) | 含有量(g) | 鉱量(t) | 品位(g・t) | 含有量(g) |
| 1 | 36 | 12.0 | 432 | 9 | 14.0 | 126 |
| 2 | 18 | 〃 | 216 | 12 | 15.0 | 176 |
| 3 | 36 | 〃 | 432 | 27 | 〃 | 405 |
| 4 | 23 | 〃 | 276 | 19 | 〃 | 289 |
| 5 | 13 | 〃 | 156 | 7 | 〃 | 105 |
| 6 | 40 | 〃 | 480 | 29 | 〃 | 435 |
| 7 | 35 | 〃 | 420 | 30 | 〃 | 450 |
| 計 | 201 | 〃 | 2,412 | 133 | 14.9 | 1,986 |

（出典）『鉱業製錬所生産年報』昭和25年分，12-13頁，22-3頁より作成。

すなわち，粗鉱生産でみると，品位は12g/tと計画段階よりもやや高いが，鉱量は月平均30トンに満ちていない。これでは，おそらく経営が成立しなかったのであろう。7月一杯で繰業は打ち切られている[100]。

再び再建が俎上に登ったのはその10年後の昭和35年であった。日東金属鉱山株式会社が同鉱区を買収し，昭和35年4月9日，共同鉱業権者となり，同年10月27日鉱業事務所設置届の提出

100) なお，前掲『北海道の金属鉱業』，藤原・松井前掲論文は休山を昭和26年7月としているが，これは同25年7月の誤りと思われる。また，前掲『北海道金属非金属鉱床総覧』（325頁）の年代，品位表記，昭和28年品位10は，それぞれ昭和25年品位12の誤りである。

をみている[101]。

再開の準備に入ったのは昭和35年6月からであったが，翌36年7月から小坂鉱山への売鉱が開始された。同年11月現在の従業員は「職員」6名，「鉱員」26名，計32名であった。

昭和36年には平均品位7～8g/tの粗鉱を月平均150～200トン採掘していたが，次第に品位は低下をきたし，翌37年には平均品位5.5～6g/tとなり，月平均220～230トンの粗鉱生産をみたが，ついに同年8月3度目の閉山をするに至ったのである。閉山時，昭和37年8月の出鉱量50トン（金品位7g/t，銀品位44g/t）が最後の出鉱となり，これをもって静狩金山の金鉱山としての生命はその幕を閉じたといってよいであろう[102]。

閉山後，昭和38年11月に地元民が資本金300万円で静狩金山興業株式会社を設立している。しかし，これはもはや産金ではなく砕石事業をおこなう会社であり，昭和47年12月に同和鉱業株式会社がその全株式を取得して今日に至っている[103]。

「採登第59号」の鉱業権はその後，日東金属鉱山から合同資源産業株式会社へと移転した。すなわち，昭和56年4月21日，日東金属は単独で鉱業権者となったが，同58年9月27日，合同資源がそれに代って所有者となり，現在に至っている[104]。

こうして静狩金山は戦後2度に渡って再開され，その時期わずかの産出をみたことはあったが，本格的な再開には至らず，結局，昭和18年の第1次閉山をもって「隆盛を誇った金山静狩は終焉」し，今日まで「遂に昔日の姿は蘇えらなかった」のである[105]。そして，先に少し触れたように，昭和17年の最終埋蔵量調査によって，それはすでに充分予想されていたことであったのである。

（本稿は旭川大学地域研究所道通松木地域研究奨励金および私学研修福祉会国内研修の研究成果である。）

101) 札幌・通産局鉱山部資料。ただし，昭和29年4月21日付で静狩金山株式会社が鉱業権登録しており，同社が日東金属の買収相手だったと思われる。
102) 以上の数字は，藤原・松井前掲論文による。
103) 『同和鉱業株式会社創業百年史』資料編，昭和60年5月，175頁。
104) 札幌通産局鉱山部資料。
105) 前掲『静狩校』19頁。